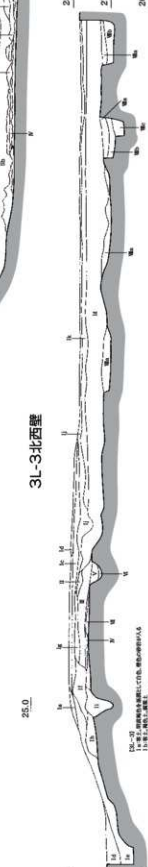


28.0  
27.0  
26.0  
25.0

3L-2 北西壁

28.0  
27.0  
26.0  
25.0

28.0  
27.0  
26.0  
25.0



第7図 調査区セクション図④ (Scale: 1/100)

墳丘基底部はこれまでの調査から第3表の結果が得られた。主軸を比較すると後円部背面側が10cm程低いのみでほとんど高低差は無く、くびれ部の基底部についても東側が20cm低い程度である。しかし、後円部主軸直交の西側と東側では、東側基底部が1.8mも低い状況が認められ、墳丘全体でも、この東側がいちばん低くなる。墳丘基底部に設定したいずれの調査区でも墳丘基底部と周溝の間にテラスが確認されている。

第3表 墳丘基底部標高 ( )は復元値

後円部背面基底部(A)		B-A
(26.2m)		-0.1m
後円部西側基底部(C)	後円部東側基底部(D)	D-C
27.0m	25.2m	-1.8m
くびれ部西側基底部(E)	くびれ部東側基底部(F)	F-E
26.5m	26.3m	-0.2m
前方部西側隅角基底部(G)	前方部西側隅角基底部(H)	H-G
(26.1m)	(26.1m)	-0.0m
前方部前面基底部(B)		A-B
26.1m		+0.1m

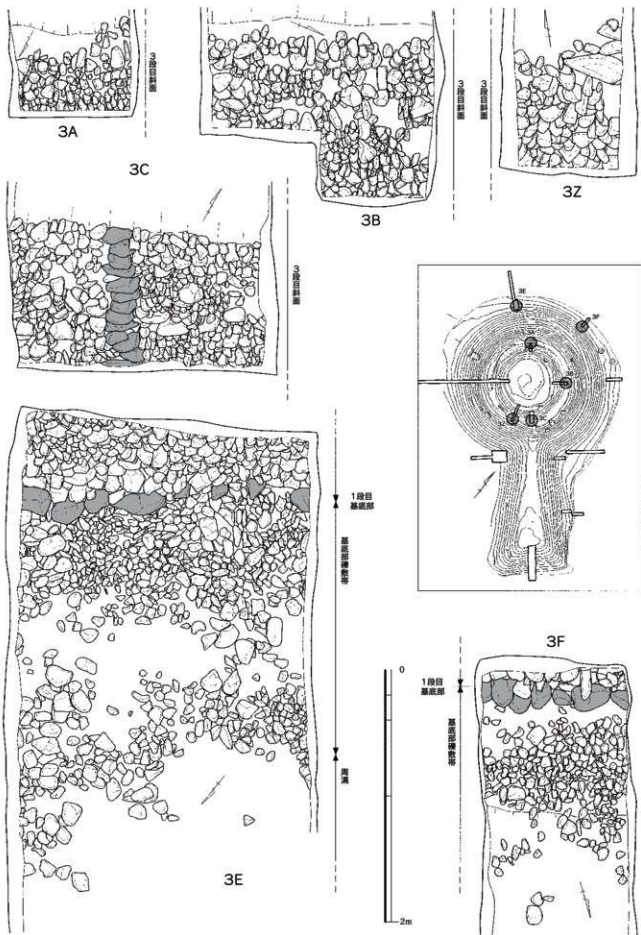
当初このテラスは、墳丘基壇の平坦面とも考えられたが、テラスの外側から周溝のごく緩やかな下りの斜面が続いており、基壇と認識できる傾斜変換を認めることができなかった。このテラス上には保存状態は調査区によって違いがあるものの礫敷がみられ、本報告ではこれを「基底部礫敷帯」と呼称する。

#### (5) 葺石と礫敷

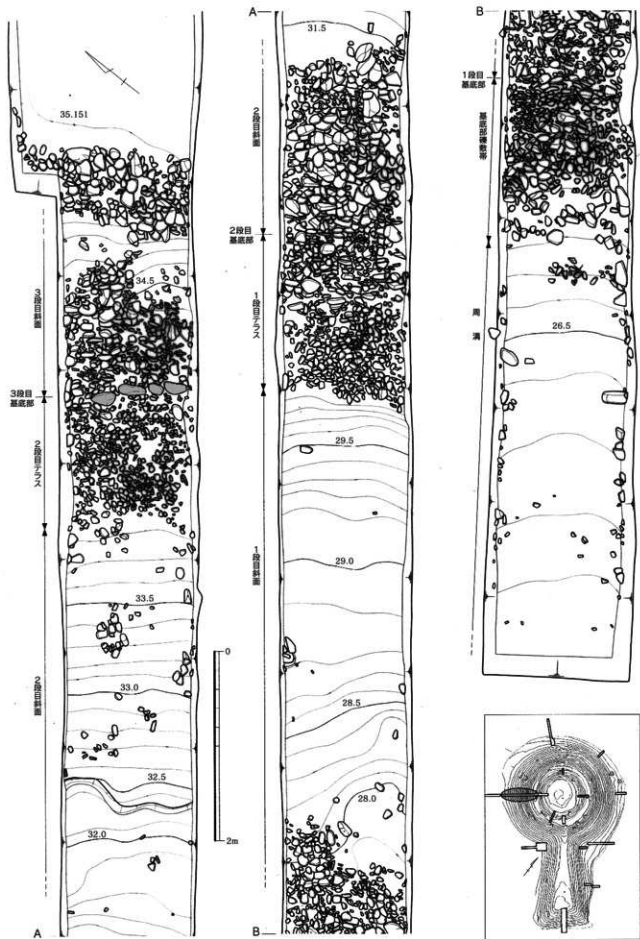
墳丘に設定したいずれの調査区でも墳丘斜面では葺石が、各段の平坦面(テラス)と墳丘基底部周囲テラスでは礫敷が検出された。古墳群全体に見られる葺石の特徴として、墳端部や墳丘の肩口などの明確な傾斜変換線を除いて、明確な区画石列がほとんど見られないことが上げられる。面的に葺石の状況を確認できた前方部前面3Jにおいても区画石列は一箇所のみである。「先ずは区画石列を配し、その後区画内に石を充填する」という、類例に多い葺石の作業工程を採用していないため、一見粗雑な印象を受けるが、葺石面と礫敷面では礫の大きさを替え、礫敷帯には10cmに満たない小円礫を配し、葺石面は一定の範囲に「10cm大の群」「20cm大の群」「40cm大の群」のように、同サイズの礫を配することで区画を造り上げている。特に、西側くびれ部の墳丘基底部に設けた3L-1では、丁寧な作業の跡が認められた。基底部礫敷帯についても20~50cmの円礫を区画石として縦横に配し、区画相互に、粒の大きさの違う礫を配置している。これらの礫は墳丘斜面に定着させる際、粘土など補強剤の痕跡は認められず、礫の定着は墳丘斜面に対して、尖った面を垂直に突き刺し定着させており、葺石面を正面に見れば、礫はやや上方を見ている。この「面に対して垂直に突き刺す」という工程上の約束が良好な保存状態に繋がっていると考えられる。葺石面と礫敷に使用される礫は砂岩製の円礫がほとんどで、礫の大きさは、基底部の根石列や区画石列に使用されるものは概ね20~60cm、葺石面は20~40cm、礫敷帯は5~15cmで礫敷帯には5cmにも満たない玉砂利状のものもみられた。

#### (6) 周溝とその周辺

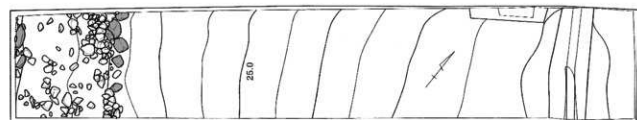
周溝は調査前の測量図でも見られるように「鍵穴形」を呈しており、前方部側面の途中から、急に幅広になる。周溝幅を実際に確認できたのは2箇所できびれ部西側の延長(3L-1、3L-2)で43m、後円部主軸直交の西側(3D)の延長上で30mを測る。周溝幅の全容を確認した3Dでは、最深部は基底部礫敷帯から12.5m先の位置で認められ、掘削はⅤ層シラス層に達し、深さ1.7m(標高25.7m)を測る。基底部礫敷帯からの下り勾配は極めて緩やかで、最深部から周溝外縁に向かって同様に緩やかに上がり、底面の断面形は「皿状」を呈する。周溝の外縁部は特徴的で、墳丘側から緩やかに上がってきた周溝の底面が外縁付近で急激に立ち上がる。3Dでは立ち上がり斜面角50°で高さ約



第8図 調査区平面図①(Scale:1/30)



第9図 調査区平面図②(Tr.3D) (Scale:1/40)

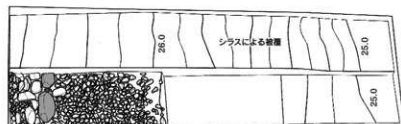


3G

1段目  
断面

基礎部破砕帯

周溝



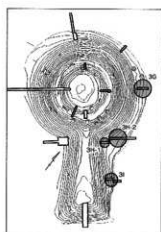
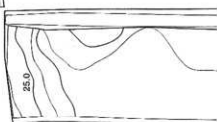
3I

1段目  
断面

張り出し部平面図

張り出し部斜面

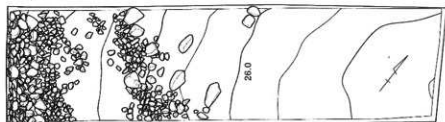
1段目  
断面



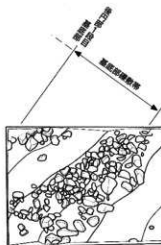
1段目  
断面

基礎部破砕帯

周溝

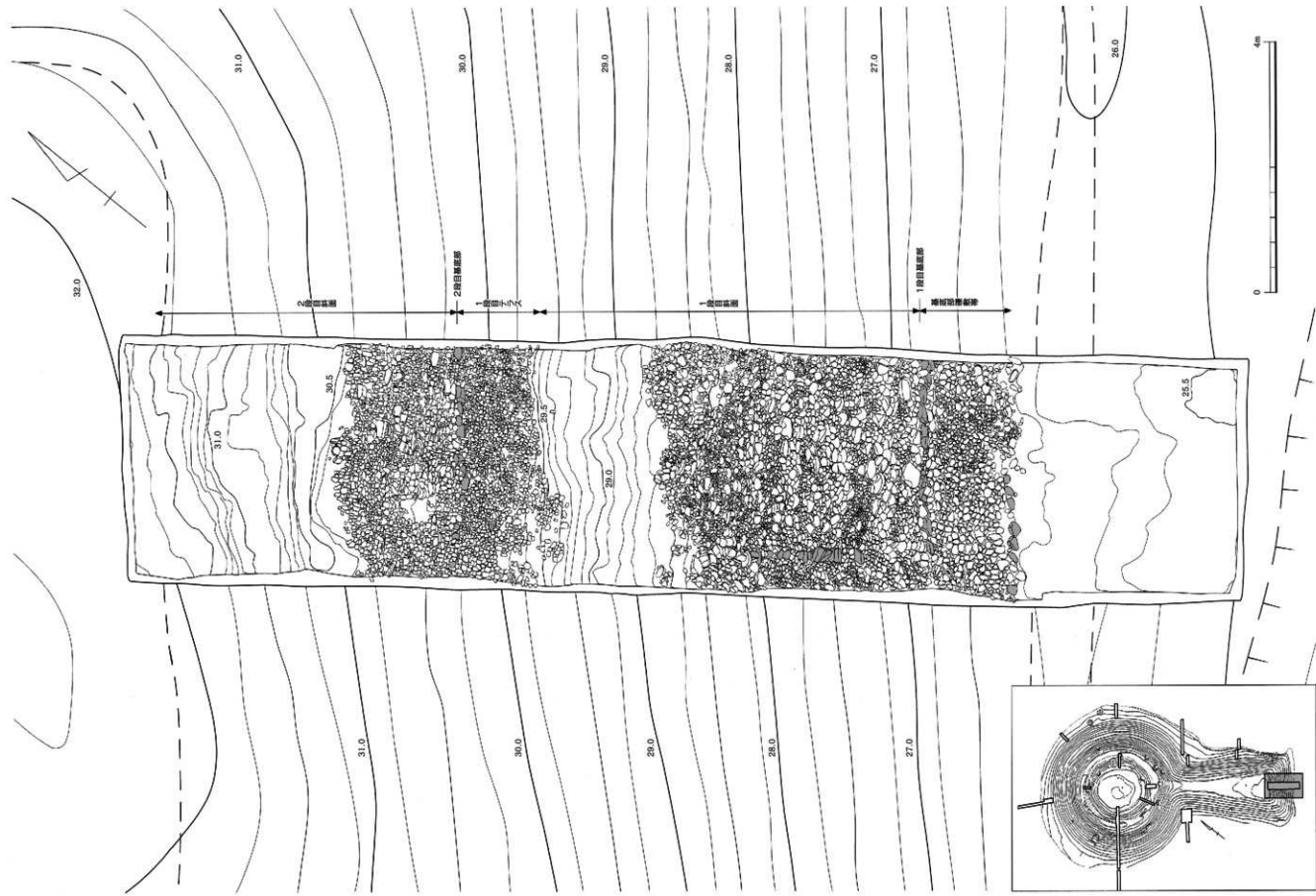


3H-1



3H-2

第10図 調査区平面図③ (Scale: 1/50)



第11图 调查区平面图④(31) (Scale: 1/60)



第12図 調査区平面図⑤(3L-1) (Scale:1/60)



2.0mの崖状になっていたと考えられる。捉えられた周溝底面は墳丘西側くびれ部の延長上(3L-2)で標高25.7m、後円部背面側(3E)では標高25.4mと、平坦に近い。この周溝底面と外縁部分の形態は、墳丘主軸より西側では同様の形態と考えられる。3号墳の東側には周堤が設けられ、西側にも存在を確認するため、周溝の外側に広がる平坦地の3箇所(3D-2、3L-3、3Q)に調査区を設定した(3D-2、3L-3、3Q)。その結果、平坦地一帯は耕作の結果と考えられる著しい攪乱が面的に入っており、いずれの調査区でも、周堤の存在を確認できる結果は得られなかった。

後円部東側から前方部にかけての周溝部分は様相が異なっていた。前方部東側側面の墳丘基底部付近に設定した3Iでは、整形されたシラスを主体とする盛土が検出された。平坦面を礎敷で整備し、周溝に向かって12°の勾配で下る斜面で整形する。前方部の推定基底部ラインよりも突出した位置で検出されており、張り出し部の存在を想起させるものであるが、検出された標高から判断すれば、地山削り出しにより整形しても良い位置にも関わらず、盛土で整形している点に疑問が残る。さらに疑問の残る結果が何点か見られる。1点目は、その造り出し状の施設を同質のシラスでさらに被覆している状況が確認され、もう一点目は「造り出し状の施設」下の基盤層がさらにシラスの置土で形成されていたのである。この基盤層のシラスの置土はくびれ部に設けた3I、後円部東側の主軸に直交する位置に設けた3G、さらには5号墳との間に見られる周堤の3号墳斜面に至り、確認されているだけでも1,900㎡の広範囲に分布する。周堤部分では厚さが30cm程度であることを確認している。その周堤斜面部掘には置土を施したのちの時代に地下式横穴が9基並ぶように造られている。さらには、そのシラスの置土の下には、本来の地山のシラスが広がっており、この地山のシラス面こそが、3号墳築造当初の周溝底面と判断される。築造順に整理すると「3号墳周溝構築(地山シラス面)」→「シラスの置土」→「張り出し部をシラスの盛土で構築」→「張り出し部をシラスで被覆」になり、それぞれには、腐植土や流入土の間層が見られないため、一連の土木工事は短期間のうちに行なわれたと考えられる。

墳丘測量図では存在の確認できない前方部前面側の周溝であるが、前方部前面に設定した3Jの基底部礎敷帯の外側では、緩やかに下る状況が見られた。掘削はVII層に及んでおり、調査区の中では周溝外縁に向かう立ち上りを確認できなかったが、VII層面まで掘削していることが周溝の存在を示しており、何れかではVII層の上位に堆積するV~VI層以下を掘削しないラインが必然的に発生する。そのラインが周溝の縁にあたると思われる。調査区の南側は一段低くなり里道が走っており、周溝部分はこの里道により滅失した可能性が高く、前方部前面には幅5m程度の他の場所と比べるとごく幅の狭い周溝が巡っていたと考えられる。

第4表 調査区整理表

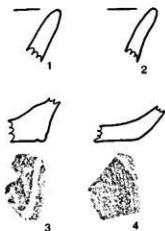
調査区	調査年度 (年号)	設定箇所	調査面積 (㎡)	調査目的	特記事項・備考
3A	10	後円部3段目	4.6	円形壇と周囲のテラスの確認	裏研堀を確認
3B	10	後円部3段目	9.5	円形壇と周囲のテラスの確認	裏研堀を確認
3C	10	後円部3段目	12.1	円形壇と周囲のテラスの確認	裏研堀を確認
3D	10-11	後円部3段目から周溝	98.7	墳丘と周溝形態確認	後円部3段築成を確認
3D-2	21	西側周堤推定地	41.4	周堤存在確認	西側周堤確認できず
3E	10	後円部墳丘基底部から周溝	32.4	墳丘基底部、周溝形態確認	基底部礎敷帯を確認
3F	10	後円部墳丘基底部から周溝	7.3	墳丘基底部確認	基底部礎敷帯を確認
3G	19	後円部墳丘基底部から周溝	11.9	墳丘基底部確認	基底部礎敷帯を確認
3H-1・2	19	くびれ部墳丘基底部から周溝	36.5	墳丘基底部確認	基底部礎敷帯を確認
3I	19	前方部墳丘基底部から周溝	15.5	墳丘基底部確認	張り出し部?を確認
3J	11	前方部前面墳丘	67.9	墳丘形態確認	前方部2段築成を確認
3L-1	11	くびれ部墳丘基底部から周溝	60.3	墳丘基底部確認	基底部礎敷帯を確認
3L-2	11	くびれ部墳丘基底部から周溝	28.9	周溝形態	周溝幅を確認
3L-3	21	西側周堤推定地	19.5	周堤存在確認	西側周堤確認できず
3P	11	西側周堤推定地	28.0	周溝形態、周堤存在確認	西側周堤確認できず
3Q	21	西側周堤推定地	35.6	周堤存在確認	西側周堤確認できず
3Z	11	後円部	9.3	円形壇と周囲のテラスの確認	裏研堀中の土壌を確認

### 第3節 遺物

3号墳ではこれまでの調査で、明確に古墳に伴うと判断される遺物の出土はない。

1～4は後円部上段に巡らされた中世の薬研堀埋土中から出土した糸切底の土師器坏小片である。5～16は3号墳南西側の周溝外出土のものであるが、5～12・14が出土した3D-2及び3L-3は地山を大きく掘り込む近年の削平が全体的に行われており、遺物はすべて攪乱土出土である。また11・12は3Q付近の客土中から出土したものである。5は複合口縁壺の口縁部で、第2口縁外面に櫛描波状文が線刻される。6・7は広口壺ないし小型丸底壺の底部で、ともに外面はミガキによって平滑に整えられる。8は大型の高坏の口縁部片で、非常に薄手で、外面はミガキによって平滑に仕上げられる。9～11は高坏各部の破片であるが、色調や胎土等の様相から、同一個体の可能性がある。9は坏部の口縁部、10は坏部の坏底部、11は脚部である。12・13は器台の脚部片で、13は復元径1.5cmの透かし孔が2ヶ所に残存している。14は高坏もしくは器台の口縁部と思われる。15は須恵器壺の口縁部から肩部にかけての部位で、9世紀代ものと思われる。16は免田式系の壺口縁部片である。

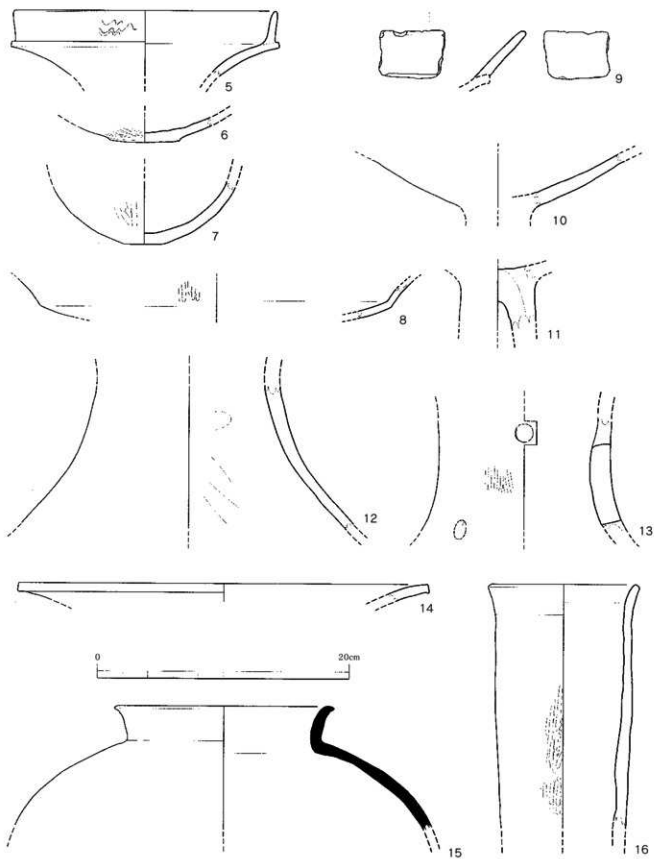
細かな時間比定を行うに足る資料はなく、中世の堀に帰属する1～4、古代の須恵器15を除き、いずれも弥生時代末～古墳時代前期前半の範疇で捉えられるものと思われる。



第13図 出土遺物実測図①(Scale:1/1)  
※宮崎市教委2001より転載

第5表 出土遺物観察表 ※法量の( )は復元値

調査 番号	出土位置 層位	器種 部位	法量 (cm)	色調		焼成 状態	調整		胎土	備考	注記番号
				外面	内面		外面	内面			
5	3D-2 埋瓦土	複合口縁壺 口縁部 (20.6)		浅黄緑	橙	やや良	ナゲか	ナゲか	1mm以下の砂粒、赤色粒を多量に含有	外面櫛描波状文	IMC3D-2
6	3D-2 埋瓦土	小型壺 底部	5.4	7.5YR5/6	7.5YR5/6	やや不良	底面ケズリ、胴部ミガキ	ハケ、ナゲ	1mm以下の砂粒を含有		IMC3D-2
7	3D-2 埋瓦土	小型壺 底部	3.9	5YR7/3	10YR7/2	やや不良	ミガキ	ナゲか	1mm以下の砂粒、赤色粒を含有	外面黒斑	IMC3D-2
8	3D-2 埋瓦土	高坏 口縁部 (30.9)		浅黄緑	浅黄緑	やや良	ミガキ	ミガキか	1mm以下の微細な砂粒をわずかに含有		IMC3D-2
9	3D-2 埋瓦土	高坏 口縁部		浅黄緑	浅黄緑	良好	ナゲないしミガキか	ナゲか	1mm以下の砂粒、赤色粒をわずかに含有	6・7と同一個体か	IMC3D-2
10	3D-2 埋瓦土	高坏 坏底部 (20.0)		浅黄緑	橙	良好	ナゲないしミガキか	ナゲか	1mm以下の砂粒、赤色粒をわずかに含有	5・7と同一個体か	IMC3D-2
11	3D-2 埋瓦土	高坏 脚部 (6.4)		浅黄緑	橙	良好	ナゲないしミガキか	ナゲか	1mm以下の砂粒、赤色粒をわずかに含有	5・6と同一個体か	IMC3D-2
12	3D-2 埋瓦土	器台 脚部 (26.5)		黄緑	黄緑	やや良	—	ナゲ	1mm以下の砂粒を含有		IMC3D-2
13	3Q	器台 脚部 (16.6)		橙	橙	良好	縦位のハケ	ナゲ	3mm以下の砂粒を多量に含有	透かし孔2ヶ所残存	IMC3Q-3
14	3L-3 埋瓦土	器台か 口縁部 (32.4)		明黄緑	浅黄緑	やや良	ミガキか	ミガキか	1mm以下の砂粒を含有		IMC3L-3
15	3Q付近 客土	須恵器 口～肩部 (16.8)		灰白	灰白	良好	格子目印き	車輪状当て具痕	—		IMC3 No. 20-21 工区
16	3Q付近 客土	長頸壺 口縁部 (11.4)		浅黄緑	浅黄緑	やや良	ミガキ	ナゲか	3mm以下の砂粒を多量に含有		IMC3 No. 20-21 工区



5~12: 3D-2  
 13: 3Q  
 14: 3L-3  
 15-16: 害土

第14图 出土遺物実測図②(Scale:1/3)